

自閉症スペクトラム児の母親に対する養育支援 —RDIによるコンサルテーションの事例検討—

Nurture support for mother whose child with Autism Spectrum Disorder
—A case study of consultation through RDI—

高橋 ゆう子¹

¹大妻女子大学家政学部

Yuko Takahashi¹

¹Faculty of Home Economics, Otsuma Women's University
12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

キーワード：自閉症スペクトラム，養育支援，RDI

Key words : Autism Spectrum Disorder, Nurture support, RDI

抄録

本稿の目的は、RDI（対人関係発達指導演法）のコンサルテーションによる、自閉症スペクトラム児の母親に対する養育支援のあり方について、事例を通して検討することである。対象となったのは、小1の男児の母親で、約1年間に18回のコンサルテーションが行われた。分析の対象は、その際に提出された親子のやりとりの映像、35のビデオクリップに対する、母親の振り返り（リフレクション）とコンサルタントのコメントである。それぞれ前期と後期に分けて比較し、変容の特徴を抽出した。

結果は次の通りである。リフレクションの内容は後期になると、否定的なものが減り、自分で意欲的に取り組もうとする内容が増えた。また、リフレクションの対象は前期後期とも“母親”自身が半分を占めたが、後期では“子ども”が減って“親子関係”に関するものが増えた。以上から、母親が映像を介したコンサルテーションを通して、自身の関わり方や子どもの見方に関する気づきが、親子の情緒的な相互交流につながったことが推測された。養育支援にあたっては、映像を活用することの重要性が示唆され、さらに安定した養育支援には、親と子、コンサルタントと親の関係システムを想定することの重要性が示唆された。

1. 問題と目的

RDI (Relationship Development Intervention ; 対人関係発達指導演法) は、自閉症スペクトラム (以下、ASD) の方とその家族を対象とした治療的教育法で (Gutstein, 2009), ファミリー・コンサルテーション・プログラム (FCP) にしたがって家族とコンサルタントが映像を活用してやりとりし、Guided Participation Relationship (Rogoff, 1990・Rogoff, 2003), “導かれた参加” という考え方を重視することが特徴である。

これまでの療育の主な流れとしては、問題行動の軽減や防止、生活スキルの獲得、トラブルが起こらないような社会的ルールや生活に必要なソーシャルスキルを教えること、つまり問題なく生活

できるようにさまざまなトレーニングすることと言える。しかしながら、すべてのことを教えたりトレーニングしたりすることができるだろうか。そのようなことを考えると、療育の在り方について疑問や懸念をもたずにはいられない。つまり、子どもの自発性や状況に応じた判断や対応、そして自立に関することを重視するならば、ある時点での子どもの個体としての能力の評価とそれに対する具体的援助の検討だけでは不十分であることは否めない。

一方、RDI では、全体的な家族の養育機能の回復を基本として、子どもの状態に応じた対応の工夫と育て直しを行っていく。どんな家族でも予想外の困難にぶつかると、養育にあたる親も不安定

になり、家族システムの機能不全が起こってくるが、ASD 児の場合、さまざまな脳の脆弱性と環境的な要因が関係して、先にも触れた“導かれた参加”関係が、養育者との間で構築されにくい状況がある。Hobson (1991)によると、ASDは生物学的基盤に根ざすところの環境と情緒的意欲的關係性 (relatedness) の障害で、機能的に、対人関係 (personal contact) に不可欠な、行為と感情の対人相互協応が円滑に作動しない。

そこで RDI ではまず、言語的コミュニケーション以前の、非言語的、情動的コミュニケーションを、親がていねいに導きながらやり直すことを試みる。つまり家族との継続的な対話を基盤にした家族支援、養育者に対するエンパワーメントを行う。具体的には、定型発達の親子関係をモデルとしつつ、発達の障がいとなるものを減らしていく。そして子どもだけでなく、親子双方のレディネス、発達の基盤作りを試みつつ、養育者が子育てに自信をもてるように、援助者 (コンサルタント) が導いていくことになる。

このように、RDI は子どもの療育・訓練ではないので、子どもに関わる大人を対象とした支援を行っていく。特徴的なのは、ダイナミック・インテリジェンス (Dynamic Intelligence ; ダイナミックな知的能力) を重視する点である。それは、変化や新たな情報への対応、あいまいな状況に対応する力、一つの対象を多面的、多方向から見る力、複数の視点や見方を受け入れる力である。さらに、コミュニケーション、経験の共有、共同作業、不確かさの対応、学び続ける力ともいえる。ルールや手続きなどを守るスキルや特定の課題に適用される特定のスキルとは明らかに異なり、柔軟性が求められる力である。このダイナミック・インテリジェンスは、社会・文化的な文脈や状況での、他者との関わりや体験によって発達するもので、大人のガイドやサポートによって、長い年月をかけて獲得されるもの、つまり文化学習のプロセスを経て伝達、習得されるものである。

大人と子ども、親子の間で、ガイドする側とそれを参照しながら見習いように学んでいく側の関係を作っていくには、一緒に共同作業的な活動をする事、結果よりも共同作業のプロセスが重要で、そこでの修正や変更、調整の体験が必然となる。ガイド側になる大人の役割としては、子どもの現在の能力を踏まえて、自信が持てるような機

会を提供することで、この考え方は“発達の最近接領域”と同様である。また、大人も自らの考え、感じなどを実際に表現することで、子どもは一緒に活動している相手 (大人) の存在を意識し、そのような大人の姿を目にすることで、感情などを表現する際の参考 (モデル) としていく。最初は、大人の方が多くの責任を担って、子どもが不安にならないようにして始めるが、次第に子どもにも取り組む上での役割を少しずつ分けていく形で、活動に伴う責任を段階的に子どもに譲渡していく。これが、ガイドする大人の役割となる。

ガイドのスタンスとしては、子どもが自発的に、また自らの意思で動けるように、状況を設定しなければならない。また、指示に従わせたりできるように教えるのではなく、学ぼうとする姿勢に注目し、ほめることよりも、一緒になって喜ぶなど、感情や経験の共有に努めることである。陥りやすいのは、子どもに何かのスキルを獲得させようとする事、ガイドすることを“訓練手段”にとらえ、結果ばかりに目が向いていては、安定した情緒的關係を築くことは困難である。

このようにしてみると、子どもの変化や力だけでなく、子どもを導いていく大人 (ガイド) も自身の在り方、子どもへの向き合い方に目を向けることが当然、必要となってくる。RDI は先にも述べたように、家族システム、親子の關係性に焦点を当てており、子どもも關係性の中で育つと考えているので、子どもの発達に大きな影響を与えると思われる、最も身近な養育者、親自身の振り返りが重要と考えている。

ここでは、母子の相互行為を母親の視点から分析し、その変容の特徴を抽出する。そして、母親に対する養育支援のあり方について検討することを目的とする。

2. 方法

2.1. 対象者の概要

今回の研究協力者は、小1の男児の母親 (30代後半) である。母親は男児が幼稚園のころ、マイペースで一方的に話してしまったり、周囲と同じように動けず、出遅れることが多かったりしたため発達に不安を感じた。その後、数か月に一度のペースで療育を受けたが、小学校では通常学級に在籍、学習面での困難は見られていない。母親は、親としてできることはやりたいという思いが強か

ったこともあり、家族を対象として支援を行う RDI に興味をもった。

2.2. コンサルテーションの方法と分析の対象、及び期間

先の FCP にしたがって課題を作成、その課題に母親が取り組み、コンサルタントがフィードバックを行った。今回、分析の対象としたのは、約 1 年間で行われた、課題への母親の取り組み（撮影した映像への振り返り、参考映像やコンサルタントからの問いに対する回答など）18 回分である。課題の主な内容は、ダイナミック・インテリジェンス、ガイドすることの理解、ガイドの役割、ガイドとなる自身の理解であった。

2.3. 分析の方法

全 18 回で提出されたビデオクリップは 35 場面である。それらを振り返って当初のねらいや戸惑い、子どもとやりとりして実感したことなどについて記述した内容（以下、リフレクション）を意味のまとまりが崩れないように区切ったところ、文章の総数は 110 となった。それを前期（7 回目まで）と後期（8 回目以降）にわけて、リフレクションの内容とその対象について分類し、比較検討を行った。内容の分類は、「positive（肯定的）」「negative（否定的）」「question（質問）」「analysis（母親による分析）」「challenge（課題）」の 5 つ、対象については「自身」「子ども」「弟」「親子」の 4 つに分けて、いずれも母親と報告者の 2 名で分類を行った。

さらにコンサルタントがビデオクリップと母親のリフレクションについて行ったコメントの内容を 5 つに分類して、母親のリフレクションと同様、前期と後期に分けて比較を行った。その文章数は 101 であった。コンサルタントのコメント内容の分類は、「ガイドとしての母親の評価に関すること」「ガイドの仕方に関する提案」「ガイドで重要なポイントとなること」「親子のやりとりに関する評価」「子どもの行動の評価」「兄弟の違いに関する指摘」の 5 つであった。

3. 結果

3.1. 母親のリフレクションの内容の変化

前期（～7 回目）までは、「イライラ」「～してしまった」「工夫が必要だった」「このままでいい

のか、判断できなくなった」のような全体的に漠然と、肯定的に捉えられない内容が多かった。例えば、「子どもと目が合う様子を撮りたいと思ったが、うまくいかず、どうしたらよいか、わからなくなってしまった（1 回目）」「気づいたらやり方を教えたり口にしたりが多い（2 回目）」「まだまだやらせようという気持ちが強くなってしまい、楽しめない（6 回目）」その後、一緒に身体を揺らしたり、母親の動きに合わせて子どもが発声したりすることに、母親が気づくようになった時期、「焦らずやりとりできる自分がいた気がする」という記述があった（10 回目）。

しかし一方で、「子どもがアルバムをめくろうとする手を無意識に押さえてつけていた（10 回目）」「会話などで相手の気持ちを推測するきっかけとなるような声かけをしたり態度で示したりしたいが、うまくいかず、私が成長していないなと思った（12 回目）」など、具体的にうまくいかなかったところを記述でき、自身で自分の課題となるところが見いだされるようになった。さらにそれ以降、「あまり焦らず、以前よりも少し、余裕が持てた感じがした（15 回目）」というような記述とともに、「一緒にできた、笑った」「ゆったりできたかも」などの記述が増えた。また、「呼吸を合わせることを意識してみた」「表情で感情を伝える試みをやってみよう」など、試行錯誤する様子が見られた。リフレクションの内容（110）を前期、後期に分けて、記述内容を 5 つに分類したものが図 1 と図 2 である。

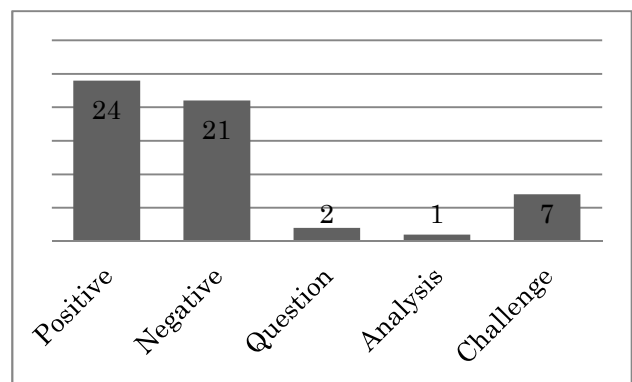


図 1. リフレクションの内容（前期）

リフレクションの内容（110）を前期、後期に分けて、記述内容を 5 つに分類したものが図 1 と図 2 である。5 つとは①POSITIVE（肯定的）、

②NEGATIVE (否定的), ③QUESTION (疑問), ④ANALYSIS (分析), ⑤CHALLENGE (課題) である。これらから前期は肯定的, 否定的な評価のいずれも多かったが, 後期になると肯定的なものがかかなり多くなり, 合わせて母親が自身にとっての課題として認識するような記述が多くなった。

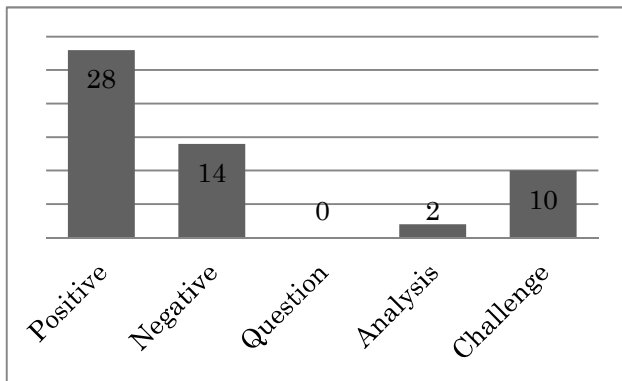


図2. リフレクションの内容 (後期)

3.2. 母親のリフレクションの対象の変化

前期, 後期とも今回, 母親自身の行為に関するリフレクションが5割ほど占めたが(図3, 図4), 前期は「うまくできない」「これでいいのか」などの否定的な内容が多かった。「母親自身」に続いて多かったのが「子ども」である。一方, 後期は「自身」が最も多かったが, 子どもが考えるのを少し待てた「余裕が前よりも出てきた」などのように, 肯定的なものが増えた。次に多かったのが「親子」で, 「子ども」の行動だけを取り上げた記述が減って「～しながら一緒に」「二人とも」など, 親子のやりとり自体に関するリフレクションが増えた。

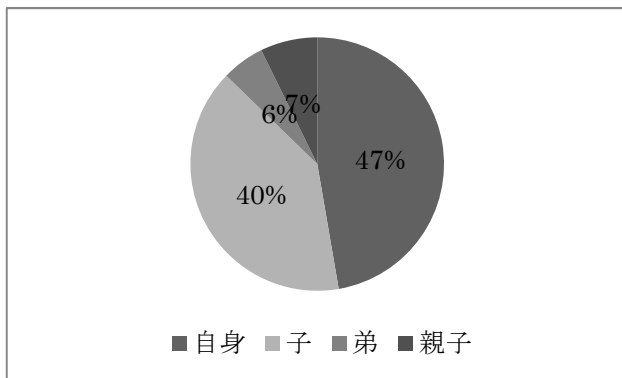


図3. リフレクションの対象 (前期)

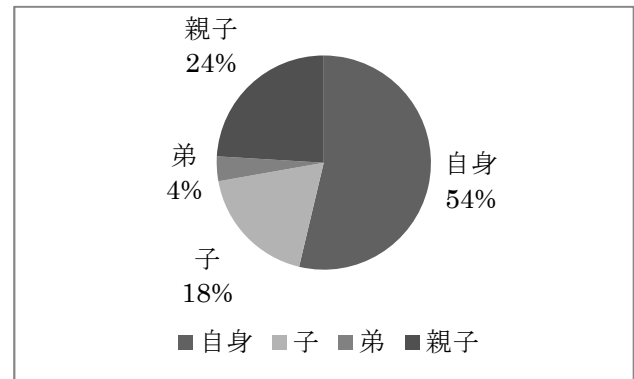


図4. リフレクションの対象 (後期)

3.3. コンサルタントのコメントの内容

コメントの内容を前期, 後期で示したものが図5と図6である。前期は, 子どもの行動特徴に関する確認に続いて母親のガイドで改善された点を指摘することが多かったが, 後期になると, 子どもの行動についてという意味では同じだが, 行動の変化(改善されたこと)の確認が多くなった。そしてそれに続いて, ガイドするにあたって大切にしたい点に関する指摘が多くなった。

当初は, 子どもの具体的な特徴や, 母親が実際に行った関わりについて確認することが多かったが, 後期では, 今の取り組みが成長した後にどうつながるのかなど, 長期的な視点にたったコメントが増えて, それが話題にできるようになった。それと同時に, さまざまなことを母親が自発的に試みるようになったのに伴って, 後期は, それらに対応する形で具体的な提案や問いかけが多くなった。さらに, 前期は, 定型発達児の弟との比較を通して, 対象となった子どもの特徴について共有することも少なくなかったが, 後期はその必要性がなくなったため, その割合は大幅に減少した。

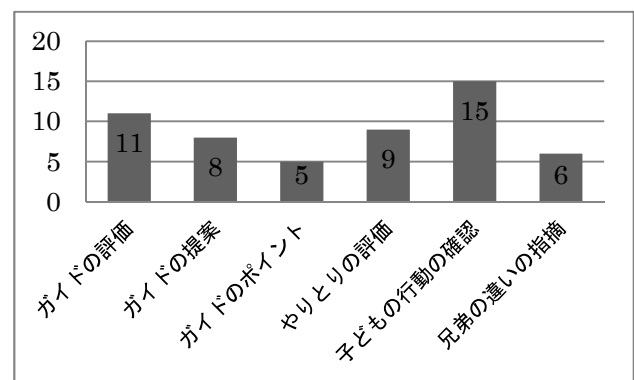


図5. コメントの内容分類 (前期)

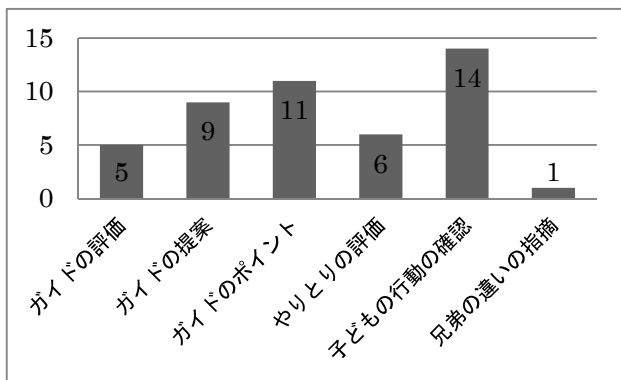


図6. コメントの内容分類 (後期)

4. 考察

4.1. 母親自身の気づきの変容

結果で整理した母親のリフレクションの内容や対象の変化を見ると、最初のころは、子どもがうまくできたかどうか、その結果に目が向きがちで、子どもの行動を肯定的に捉えられずにいたことがわかる。それが自分の関わりに関する否定的な評価や不安に影響していたと推測される。コンサルテーションを通して、評価しやすい結果やわかりやすい行動に注目しがちだった自らの構えや思考に気づいたことが、共同調整や経験の共有、ノンバーバル・コミュニケーションの重要性の認識につながったと考えられる。母親の変容のプロセスを整理すると、図7のようになった。

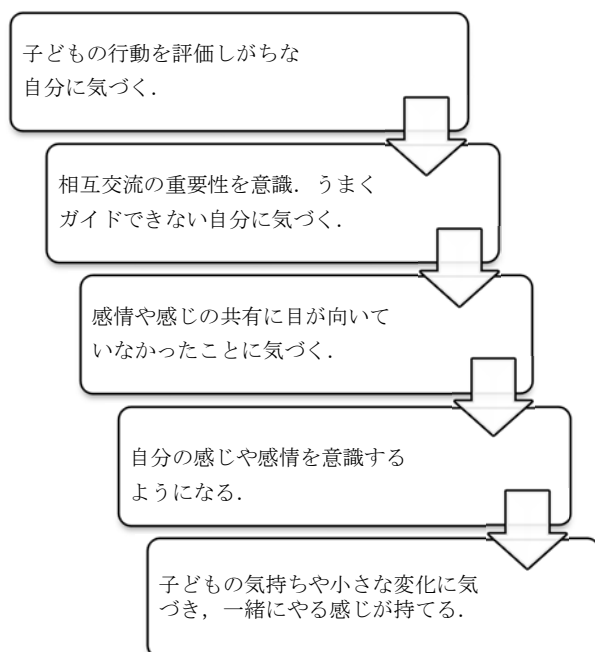


図7. 母親の変容のプロセス

RDI では、例えば何かしら一つの目的に向かって人と協働できるようになるには、まずチームとして協力できる関係にあること、その関係を築く必要があると考える。もし、協力関係がまだ安定していなかったら、それ以前に、互いの動きを調整できること、共同調整 (Fogel, 2008・Fogel, 1991) からやり直すことが重要だと考えている。

共同調整の最も基本的な例は、定型発達児の親子の間でごく自然に行われることで、手をつないで歩調を合わせたり、童謡に合わせて身体を一緒に動かしたりするような、単純なことである。明確な目的はないが一緒に時間を共有していること自体が安心できるようなやりとりである。そのような相互交流ができる関係であることが互いの信頼感につながると思われる。ASD の場合、このような相互交流が難しく、相手からの投げかけを認識すること、また応答することが難しい。しがたってそこで得られる安心感や情緒的な交流も得られにくいことになる。母親も自らの働きかけによって子どもの笑顔が引き出されたら、さらに働きかけたくなるが、そうでなかったら不安を生じやすくなるのも不思議ではなく、そのような状況に陥りやすい母親に対する養育支援が、その後の親子関係にとっても重要になってくる。

本事例においても、ごく自然なやりとりになることが難しい部分があったので、時間をかけながら共同調整から情緒的な交流になることを試みた。そのプロセスにおいては、母親自身が子どもとの向き合い方を振り返り、子どもとの間にかみ合わなさやズレを感じることで、母親の変容には大きかったといえる。そして感じられたかみ合わなさやズレを修正すること、その感じが変わるプロセスを映像を通していいねいに振り返ること、リフレクションが母親の子育てを支援することになったことが推測された。

4.2. 母親支援のあり方

今回、コンサルテーションにおいて、母親と子どもがやりとりする映像を活用したが、それによって子どもの気持ちの推測だけでなく、母親の自己の気持ちや感情の振り返りが促され、子どもとの相互行為の質が深まったことが推測された。

親子の映像を活用することについて具体的に考えてみたい。5分程度の映像であっても、そこには文章や言葉だけでは伝えきれない、多くの情報

が含まれているといえる。アイコンタクトにしても、どのような状況なのか、視線の方向やそのときに伴う動作などを含めると、いろんな特徴が見て取れる。また、そのやりとりに影響している場の特徴などは、その場では気づかないことも少なくない。母親が自ら振り返って気づくことも多いが、コンサルタントが気づいたことをコメントすれば、母親は自分の視点や見え方に、別の視点を加えることができる。また、映像を通して得られた母親の気づきに対して、フィードバックすることによっても自分の視点を客観的に捉えなおす機会となるだろう。

このようなコンサルタントとのやりとり自体、母親は不安を感じることもあるかもしれないが、不安を感じることも含めて、母親が子どもとのやりとりについて感じたり考えたりすることを、肯定的に受け止めることがコンサルタントには求められる。RDI では、一緒に何かに取り組む際に、子どもが感じ、考える機会を確保すること、換言すればやりとりのペースをゆっくりにしたり、待つことを重視する。早急に答えを導くというよりも、相手やその状況、さらに自分の状態にも目が向けられる瞬間や時間を持てるようになることが、子どもの対人関係を改善するきっかけになると考えるからである。

したがって、母親が、子どもが考えて判断する機会をつぶさず、確保できるようになるためには、母親自身も同様に、感じたり考えたりする機会を、コンサルタントによって保証されることが必要である。特に ASD 児の場合、情緒的な交流が難しいため、小さな変化を積み重ねるプロセスを支えることが重要となる。つまり、援助者が養育にあたる親をガイドし、親が少しずつ自信をつけて、家庭において子どもをガイドしていくというパラレルな関係システムを想定した援助の有効性が、今回の事例から示唆された。

付記

本研究は大妻女子大学戦略的個人研究費 (S2824) の助成を受けたものです。

謝辞

今回、研究協力を快諾していただいたご家族に、心より感謝申し上げます。

参考文献

- [1] Fogel, A. (1991). *Developing through Relationships: Origins of Communication, Self, and Culture*. The University of Chicago Press.
- [2] Fogel, A. (2008). Relationships that support human development. In A. Fogel, B.J. King, & S. Shanker (Eds.). *Human development in the 21st century: Visionary policy ideas from systems scientists*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- [3] Hobson, P. (1989) 認知を越えて—自閉症の理論, 野村東助訳, In Dawson, G. *Autism: Nature, Diagnosis, and Treatment*. New York: The Guilford Press. 野村東助・清水康夫監訳 (1994) 自閉症—その本態, 診断および治療. 日本文化科学社.
- [4] Rogoff, B. (1990). *Apprenticeship in Thinking: Cognitive Development in Social Context*. New York: Oxford University Press.
- [5] Rogoff, B. (2003). *The Cultural Nature of Human Development*. New York: Oxford University Press. 當眞千賀子訳 (2006) 文化的営みとしての発達: 個人, 世代, コミュニティ. 新曜社.
- [6] Gutstein, S. (2009) *The RDI Book: Forging New Pathways for Autism's and PDD with the Relationship Development Intervention Program*, Connections Center Publishing.

Abstract

The purpose of this paper is to clarify the importance of nurture support for a mother who has a child with Autism Spectrum Disorder (ASD) through Relationship Development Intervention (RDI). The participant was a mother whose child was a 6-year-old boy. The modification process of nurture support was analyzed by her reflections and comments from consultant. The results were as follows: 1) The mother's negative reflections decreased in number, conversely the challenges she faced in interacting with her son increased instead. 2) Through the consultation process, she focused on the relationship with her son more than his skills in her reflections. According to the above case study, the author focused on the utilization of video clips to notice small changing moments in communication between mother and child. This report highlighted two points: the importance of the mother's awareness of relatedness with her child and support based on a viewpoint of family system.

(受付日 : 2017 年 6 月 2 日, 受理日 : 2017 年 6 月 14 日)

高橋 ゆう子 (たかはし ゆうこ)

現職 : 大妻女子大学家政学部児童学科教授

筑波大学大学院教育研究科障害児教育専攻修了。

専門は臨床心理学。臨床発達心理学。現在は、自閉症スペクトラム児と養育者、家族に対する支援について、対話の重要性や関係性に焦点をあてた研究を行っている。